『篆刻（石印）』（姓名印を刻す）

助教授　周東清芳

前回の公開講座『陶印』の反省を踏まえて、今回は石印に挑戦していただいた。今回の主な変更点とその理由は次のとおりである。

(1)　石材を石にした。

石印材の方が入手しやすく、緻密で、刻し了われば そのまま作品となる。（陶印はあとで釉薬をかけて焼かなければならない）また、今回は初心者用に内蒙古産の巴林石（軟らかいので）を用意した。

(2)　回数を三回にした。

参加者のほとんどがなんらかの仕事を持っていて、予習や宿題がこちらの希望どおりにできず、細かく不慣れな作業のために進度にかなりの個人差がでる。

(3)　用具・用材の大半を本学で用意しておいた。

町の文房具店では入手しにくいものも多く、専門店でも使い勝手のよくないものを買わされてしまうことがある。

(4) 模刻（姓名印）をした。
篆刻家の刻した姓名印を模刻することによって、自分の刻する印のイメージを湧かせる。（線質・字形・レイアウトなど）

(5) 参加者の姓名の文字（篆刻）を字典からコピーしておいた。
時代・書風が一致する文字を組み合わすことができるように配慮した。前回の講座（陶印）では、篆刻と隷書をミックスしたものがあった。

さて、開講して閉口したのは遅刻と欠席、それに宿題のやり残しであった。まるで本学の学生の授業のようである。半紙に普通の大きさの文字を書くのではなく、二四ミリあまりの方形の中に二～四文字を書いて刻すのだから、初心のうちはかなり失敗も多く時間がかかる。そのために講座の進め方を予めプリントして配布しておいたのに、十分に理解していただけなかったのか、一回目の模刻の仕上げ（時間内でできなかった人は宿題）で差がつき、それ以降は思い出すのも辛いほど……。各自の進度がかなり違ってきたために、ひとつの事柄についての説明や実技指導を何度もしなければならなかった。まるで六学年の複式学級を担当しているような慌ただしさだったのを覚えている。やはり篆刻などは公開講座では無理で、カルチャースクールのようなところでじっくり時間をかけてやるべきものなのかもしれない。最終回に批評会を予定していたが、それどころではなかった。まだ印稿ができていない方がいたくらいである。

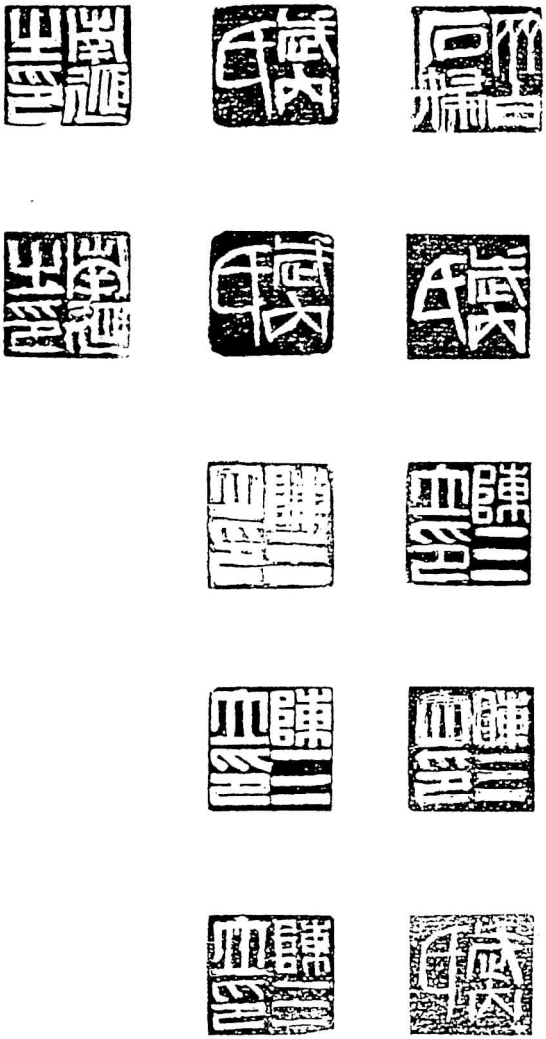
しかし、参加者はそれぞれに家庭や仕事をお持ちで、学生のような優雅な身分ではないから、無理もな

かったのであろう。遅れを取り戻そうと必死の形相で取り組んでいる姿勢は、本学の学生には最近見かけられないものだった。何度も何度も印稿を書き直し、鏡に映したものを印材に写す段階でまた何度も修正する。暗い教室での細かい仕事は大変な御苦労だったと思うが、最後まで投げ出さずに完成されたことには敬意を表したい。数か月経ってから押印した印箋を届けてくれた方もある。普通の学生ならまずできないことである。

実技の講習なので、参加者の努力と才能の一端を御目にかけてまとめとしたい。（講師の立場を危うくする作品もある）参加者のこれからの作品に期待したい。

先に載せるのが模刻作品で、後が自作の姓名印である。そのあとに模刻用に使用したプリント（日中篆刻家の姓名印）を載せておくので、見くらべていただきたい。

模刻作品



自用姓名印（オリジナル）

池田隆徳

福榮澤知

小林一子

青沼茂印

馬場

井出素

小林一子

岩倉伴昌

西澤玉恵

西宇

小林一子

福澤米印

典子

井澤亀保

寺門寸美

田邨開作

井澤

（参考）模刻用に集めた姓名印

南延之印（篆印）

陸三立印　黄士陵

何紹基印　趙之謙

大素紋印　吳昌碩

金井清　篆刻

小川平吉　篆刻

藤田四郎　河井荃廬

比田井象之　河井荃廬

日下東作翁　河井荃廬

井筒貞印　河井荃廬

武内氏　篆刻

尾張氏氏　河井荃廬

紫子　齊璜

流霞時客　徐三庚

泉風閣主　齊璜

直愛之印　齊璜

完白山人　鄧石如

石鐘五主　吳昌碩

稚子之印　河井荃廬

我觀道人　吳熙之

塊蘇齋主　趙之琛

後凡歌人　新井玉霞

可平　齊璜

春房女史　鄧散木

齊白石博　齊璜